

山本周五郎全集

第二卷

講談社



山本周五郎全集

第2巻 山彦乙女 栄花物語

昭和39年2月20日 第1刷発行

定 価 480円

著 者 山本周五郎

発行者 野間省一

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社 国宝社

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽町3ノ19

電話 東京(942)1111(大代表)

振替 東京3930

© Shugoro Yamamoto 1964

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

山本周五郎全集 第二卷 目次

山彦乙女

三

栄花物語

一三

解説 大井広介

四〇

デザイン
伊藤憲治

山
彦
乙
女

序の章

安倍半之助が、ついに彼の生涯を縛りつけることになった。「かんば沢」の名を、初めて耳にしたのは十歳の年のことであった。それはかなりきみの悪い、妖しい話であり、のちに、兵庫という叔父の奇怪な失踪、という出来ごとにも、関連していた。

遠藤兵庫という人は、半之助にとって母方の叔父に当り、道楽者ではない、という噂をよく聞いた。そんなことが祟ったものかどうか、甲府勤番にまわされたが、一年ぶりで江戸へ出て来て、半之助の家に二日ほど泊ったとき、その話しをしていった。

叔父は背丈のすらりとした、眼のやさしい、なかなかの美男で、立ち居もおっとりしていたし、いつも静かな笑い顔をしていたが、それはあいそがいいというより、むしろ皮肉な、人をばかにしているといったような、感じのものに近かった。

——あの人は小さいじぶんからあんなふうでしたよ。母はその弟のことをよくこう云っていた。

——御先祖の忌日のようなことでも茶化してしまうんです、ものごとをなにつまじめに考えることができない人

なんですから。

しかし母は叔父を愛していたようだ。

叔父のほうでも、この六つ違いの姉が好きだったらしい。半之助の記憶では、母の部屋か父の居間へゆけば、いつも叔父がいて、退屈そうに寝そべったり、酒を飲んでいたりしたように思う。

兵庫の家は麴町五番町にあり、実の母親と、くみという妻と、千之助という男の子がいた。叔父はそのくみという妻を嫌っていた。詳しいことはわからないが、なにか事情があったのだろう、あるとき叔父が父に向って、あざけるような調子で、こんなふうに云うのを聞いたことがあった。

——あれが黙って坐っているでしょう、するともう娘のように可憐で、淨らかで、いやらしいことなんか塵ほども知らない、といったふうに見えるんですからね、けがらわしいとは思わけれど、憎む気にはなれませんね。

妻だと名はささなかつたが、明らかにその人のことを云っていたようだ。例によって笑い顔をしていたが、けがらわしい、というするどい言葉は、幼ない半之助にも忘れられないものであった。

遠藤は母の実家であるが、ふしぎに安倍とは往き来がないので、外祖母のことも、従兄弟に当る千之助のことも、半之助はよく知らなかった。しかしくみという叔母の印象は、かなり鮮やかに残っていた。軀の小柄な、色の白い、

いつも泣いたあのような眼つきをした、声のきれいな人であつた。けがらわしい、などという表現とはまったく縁のない、たおやかに美しい人であつた。

甲府から初めて出て来たときも、叔父は五番町へは孫七といふ下僕をやり、自分は赤坂一つ木の安倍の家に旅装を解いた。

家族とのこうした不和が、どんな理由によるかということとは、半之助はもちろん無関心であつた。ずつとのちになつて、おぼろげに察しはついたが、それをもっとはつきり知りたいとは、決して思わなかつた。但しその不和のために、後日、叔父がふしぎな失踪をしたとき、その遺品が五番町でなく、安倍の家に托され、ひいては半之助の運命をも変えることになつたのではあるが――。

さてその日の夕餉は、久方ぶりの叔父をかこんで、賑やかに話しがはずんだ。

話題はしぜん、甲府のことが中心であつた。半之助はそのなかで、「隠し言葉」「隠し草鞋」「隠し湯」などということをも、面白く聞いた。それは、甲斐の国には温泉が七つあるが、みんな所在が秘密にされていたこと。「ゆこう」と云うばあいに「ゆかず」と反対に云うこと。また草鞋は前うしろが逆に作つてあり、したがって地面には足跡が逆になつて残ること、などであつた。……半之助はびっくりして、思わずさう質問した。

「どうしてそんなにみんな隠なしちゃうんですか」

叔父は笑つて、「それがねえ、みんな武田信玄の計略だつていうことだよ」

言葉で敵の耳をくらし、足跡で敵の眼をくらす。と、いうわけださうである。また甲府周辺の言語や風俗には、信玄にむすびつけて伝承されるものが少なくない。たとえ「叱られる」ということを方言で「よまあれる」というが、これは信玄が家来の過失を書きとめておいて、適当なときに、まとめて読み聞かす、――おまえは某月某日これこれの失策をした、某月某日にはしかじか、某月某日には、というぐあいに叱る。つまり読みあげられる、読まれるという意味ださうで、ほかにもこれに類することは驚ろくほど多い、と叔父は云つた。

「もちろん真偽のところはわかりませんが、おそらく附会したものでしょう、信玄を敬慕する感情からうまれたんでしょうが、とにかく土着民の信玄を崇拜することは、殆んど宗教的といつていいほど、根づよいものです」

「それだけ武田氏の治世が長かつたんだね、六百年か七百年は続いたんだらう」

「六百年が少し欠けるくらいでしようかね」

それからまた、信玄の石棺、という話しが出た。

省略していうと、信玄が勝頼によつて武田氏の亡びることを予断し、やがて再興をはかる者のために、伝来の白旗や、兜や、宝玉黄金などを巨大な石棺におさめて、どこか

へ隠してある、というのであった。

「まさかそんなことが、まじめに信じられているのではなからう」

「それがまじめなんですね」

叔父はもう少し酔って、赤い顔になっていたが、どこかしらいつもと違って、ねばねばするような表情があった。

「またそれについて、それと関係があるんじゃないかと思う話があるんですよ、こいつは石棺なんぞより、はるかに物語めいているんですがね」

それが「かんば沢」のことであった。

甲府から西へ六里ばかり、巨摩郡の甘利郷という山間の村に、「みどう」と呼ばれる地主の屋敷がある。おもてむきは単なる百姓の地主で、べつに苗字はなく、代代の主人は清左衛門という。年貢帳などでみると、さしたる地所持ちではないし、かつて庄屋とか戸長とかいう役を勤めたこともない。しかし近郷一帯の住民から、ひじょうに尊敬されている。みどうとはどういう意味であるか、おそらく「御堂」と書くのではないかと思うが、その家族の者が通ると、住民たちは土下座もしかねないくらいで、それが殆んど、巨摩郡ぜんたいにわたっている。

甲府城では、幾たびか探索を試みた。

土着民に特殊な勢力をもつような者は、そのころの政治としては放任できない。武田氏再興、などというばかげた俗信が、どんなはずみに、どんな騒ぎを起すかも、しれな

いからである。だが、探索は成功しなかった。

みどう家そのものには、どう調べても不審なところはないし、住民たちからは、なに一つ、聞きだすことができなかった。ただその附近に二三の奇怪な伝説がある、甲冑武者の亡霊が、深夜に行列をする甘利谷とか、甲斐の国じゅうの狸が、年に一度集會をひらくという、狸の談合場とか、近づく者は生きて帰れないという、かんば沢とか、そばへ寄ると人でも獣でもひき込むという権ガ池。などである。

そのなかで「かんば沢」というのが、みどうの家となにか関係があるらしい。幾たびかの探索で、それだけは推測することができた。

そこで前後五回にわたって、かんば沢を調べようとした。現に三人そこへはいった者がある。しかし二人はそのまま行方不明になり、一人は辛うじて助け出されたが、白痴のようになっていて、まもなく狂死してしまった。

「その狂死したというのは、つい五年ばかりまえのことなんです」

叔父の兵庫はこう云って、ふと、きらきらするような眼をした。

半之助は以上のことを、そのときぜんぶ覚えたわけではない。二回めの叔父の話しや、その後には起った出来ごとが重なって、ほぼまとまった記憶になったのである。しかし、二人が行方不明になり、一人が狂死したという「かん

「ば沢」の名は、幼ない彼にとつて、強烈な印象であった。

それから二年めの秋に、叔父が公用で出府し、こんどはひと晩だけ泊つていった。そのときまた「かんば沢」の話が出た。

「ちょっと妙な好奇心が起りましてねえ」

さりげなく云いながら、どうやら自分から願つて、みどりの調査を始めたようであった。

なにかわけでもあるのか、なんとなく言葉を濁すような感じだったが、話しはこのまえのときよりずっと現実的で、しかも（特にそのころの半之助にとつては）かなりきみの悪い、内容のものであった。

狸の談合場というのは、八月（陰曆）十六日から十八日まで、夜の八時から十時へかけて、じっさいに狸ばやしが聞える、そうであった。

「そこは尾草という部落のうしろで、松林にかこまれた、かなり広い台地のような場所ですがね、私は三晩ともそこへいつてみたんです」

叔父は例のように笑い顔をしていたが、それはどこかしら硬ばつてみえた。

「もちろん土地の者はそんなことはしません、その三日四晩は近よりもしない、近よることは嚴重に禁じられているんです」

「狸がほんとお囃しをしていたの」

半之助は堪りかねて訊いた。叔父は頷ずいて、ちょっと

まをおいて続けた。

「たしかにね、笛や太鼓の音が聞えるし、がやがやと、なにか大勢で云いあっているのも聞える、はっきりとはなく、高くなったり低くなったり、ときには遠くかすれたりするが、聞えることはまちがいないんです」

叔父はそつと近づいてみた。ちょうど月のある晩で、まだ月は低く、光りも弱かつたけれども、その台地はかなりのつきり見ることができた。

しかしなにもいなかつた。まわりをかこむ松林は、しんとして枝も動かず、いちめん草の茂っているその台地は、あふれるような虫の声だけであつた。なにももの影も無かつた。そして、やはり狸ばやしは、そこで聞えていた。兵庫はこう云つて、低い声で、その笛太鼓の音や、かすかな人ごえなどを、まねてみせた。

叔父はまた、甲冑武者の亡霊も見た。それは四月十一日の、深夜のことであるが、甘利谷の山道をおよそ五十人ばかりの行列が通つた。先頭には白の大口に、きせながを着け、白い柄の長巻を持って、白い法師頭巾をかぶつた武者がいた。あとに続く者はみな甲冑であるが、これも鎧下はみな白いし、兜の眼庇から白い布が、顔を隠すように垂れていた。闇夜のこと、さだかには見えなかつたが、その亡霊の武者たちは、まっ暗な山道を音もなくやつて来て、隠れている叔父の前を通つて、武田郷のほうへと、音もなく去つていった。

「その白い古風な恰好といい、足音もたてず、すうっと、声もなく通ってゆくところは、亡霊という以外に云いようが……」

半之助は身ぶるいをした。

ほかにも話しはあった。

みどりの屋敷は、念入りに改造してあるけれども、明らかに館城の構えである、とか。武田郷というところに、古い八幡宮があり、うしろに古代の塚などがあって、いかにも由緒ありげにみえる。土地の者はただ八幡社と呼んでいるが、じつは武田八幡といつて、武田氏の始祖を祠ったものらしい、とか。いもじ谷というところは、古い鉾澤などがごろがっている。むかし鑄造所でもあったらしく、地名のいもじは「鑄物師」と書くらしい。などということであった。

「かんば、沢へも今年の冬には、はいつてみようと思いません、遠くから見たところでは、叢林が深すぎてちょっと近よれそうもない、冬でなければだめらしいんですよ」

そんなことも云った。

その他にもいろいろあったが、半之助には狸の談合場と、白い亡霊の行列とが、いちばんつよく頭に残った。こうして明るる朝、甲府へ帰任していった叔父は、それから約一年半のち、ついに行方知れずに、なったのである。

もちろん江戸ではなにも知らなかった。また、そんな異常なことが起つていようとは、想像もしなかったのである

が、中一年おいて、元禄九年の三月、甲府から下僕の孫七が出て来て、初めて意外な事実を聞かされたのであった。

だいたいを記すところである。

江戸から帰った年の冬、叔父は一人で甘利郷へでかけていった。まえにもたびたびいったし、そのときも氣がるにでかけたのであるが、そのまま三十日ほど戻って来なかった。

孫七は氣が気ではなかった。役所でも捨てておけなくなり、同僚の人たちが、小者を二十人ばかり伴れて、捜しにいった。五六日もかかって、その附近を隈なく捜したところ、どうやらかんば沢へはいったらしい、ということがわかった……まえに叔父が自分で話したように、そこでは二人が失踪し、辛うじて助かった一人は狂死している。またそれ以前にも、そうした例があったそうで、

——かんば沢へはいつたものなら、もうしようがない。——ということ、その人たちは、断念してひきあげた。しかしそれから十五六日して、ふいと兵庫は戻って来た。

少し瘦せたのと、顔色が悪いのをべつにすれば、さして変わったところはなかった。ただ頭がぼんやりしているようで、失踪ちゅうのこととはなにも記憶がなく、役所へ呼ばれても、満足に返答がでなかつた。

——暫らく静養するように。

こういつて休暇を与えられたが、それからずっとひきこもつて、一日じゅうなにかぶつぶつ咳やいたり、夜半にと

つぜん起きだしたりして、見ているほうではらはらすくらい、おちつきがなかった。

そんなふうにして年が暮れた。だがその翌年の二月、こんどはまったく無断で、ふいとどこかへ出奔した。

この二回めの失踪は百二十日も続き、七月中旬になって、ある雨の降る早朝、住居の表でに、頭からぐしょ濡れになって、茫然と立っているのを、隣家の下僕に発見された。

兵庫はひどい姿になっていた。蒼黒くむくんだ、溺死者のような相貌になり、手足は極端にまで痩せ、臉や指趾は絶えず顫戦し、唇からはよだれが垂れた。十日ばかりは、死んだように寝こんでいたが、孫七に向って、——今後おれを外へ出さないように、嚴重に見張っていて呉れ、おれがなんと云おうとも決して出してはいけない、必要なら縛ってもいいから、こう繰り返して云った。

孫七は当時四十五六で、力の強い、快活な、胆の太い男だった。しかしえたいの知れない主人の挙動に、さすがの彼も怯えたようになり、おちおち眠ることもできなくなつたそうである。……自分で云つたとおり、兵庫はしきりに家をぬけ出ようとした。そのときは病気の発作が起つたようなくあい、全身をがたがた震わし、焦点の狂つた眼で宙をぬめつけながら、抱き止める孫七に反抗して、恐ろしいほどの力で暴れた。

——あの約束は冗談だ、おまえをからかったのだ、おれ

は役所へゆくんだから放せ。

そんなふう云つたり、罵り喚いたり、孫七の腕に噛みついたりした。またべつときには、とつぜん獣のように呻きだして、——早く止めて呉れ、おれを押えて呉れ、と悲鳴をあげることもあった。

なにか眼に見えない魔物でもいて、妖しい力で彼を招きよせてもするかのような、なんともきみの悪いありさまであり、本当に手足を縛らなければならぬようなこと、二度や三度ではなかったということだ。

こんども失踪ちゅうのことはなにも語らなかつた。記憶があるのかないのか、役所からなんでも人が来たが、その点になると頑強に口をつぐんだ。同僚たちは代る代るみまいに来た。もちろん医者にもみせし、祈禱師や修験者を呼んだりした。およそ四十日ほど、こんな状態が続いたあと、少しづつ軀もよくなり、発作の起る回数も減つて、熱心に書きものなどするようになった。……これなら恢復するかもしれない。そう思われたのであるが、九月下旬のある日、孫七がちょっと用達しに出たあとで、とつぜんまた行方をくらましてしまった。

庭の沓脱ぎ石の上に木犀の枝の剪つたのが捨ててあり、縁側に花鉢があった。木犀を剪つて、活けるつもりで、そのまま出奔したもののようであった。

それが最後の失踪であった。

同僚の二三と孫七とで、甘利郷のあたりを捜してみた

が、やっぱりかんば、沢へはいったらしいということで、どうしようもなかった。十二月に役所から人が来て、家の中を調べたところ、持ち物はきれいに始末してあり、その処分の仕方を書いたものや、江戸の家族へ宛てた、遺書のよなものも発見され、いろいろな条件から、こんどは帰らないだろう、ということがほぼ明らかになった。こうして行方不明のまま、兵庫は病氣隠居ということに定り、孫七はあと始末をして、江戸へ帰って来たのである。

「これは一つ木のお屋敷へ預けるようにと、書いてございましたので」

孫七は語り終つてから、こう云つて油紙に包んだ物を渡した。

半之助はそのとき十四になっていた。もうつまらない妖怪談などを信ずる年ではなかったが、この出来ごとの異様さと、一種の鬼氣に似たぶきみさとは、相当つよくまいらされた。

——かんば、沢。

むろん見たこともないが、どす黒く叢林の生い繁った、もののけやあやかしのわらわらとうごめいている、妖しい陰暗たる谷間。そんな風景が想像されたし、白い亡霊の行列とか、狸ばやしなどの話しとともに、思いだすたび不快な、ぞっとするような気分におそれられたものであった。

彼が十六歳になった年の七月。虫干しのときに、偶然、叔父の遺品を見た。土蔵の中を片づけているといつか孫七

の持つて来た、あの油紙の包がみつかったのである。半之助はすぐに紐を解いた。油紙は二重になっており、さらに風呂敷で包むという嚴重さで、その中には数冊の筆記と、二枚の大きな地図のようなものがあつた。

地図の一是武田氏の旧城址と、その出城の位を考証したものであり、他の一是甘利郷の略図らしかった。筆記は見聞記が二冊、日記が三冊、それからもう一冊、表紙に「みどう清左衛門に関する調書」と書いたものがあつた。半之助はちょっとためらつたが、手ばやくその四五枚をめくつてみた。

達筆ではあるが、文字は粗密こもごもで、統一がなく、乱暴に消したり、書き入れがあつたりして、土蔵の中の光りでは、ちょっと判読がむつかしかった。そして、その一枚に、不規則な菱形の、紋どころかと思える絵をみつけたとき、母の呼ぶ声でしたので、慌ててそれを片づけて立つた。

いつか機会をみつめて、叔父の手記を悠々^{ゆゆう}と読みたいたいと思つたが、父が半之助の見たことを気づいたのだらう。どこかへしまひ変えたらしく、たびたび捜したがみつからなかつた。そして、時の経過とともに、しぜんと忘れてしまつた。

落 雷

一

宝永五年六月二日。將軍綱吉は、柳沢吉保の邸の、宴遊に臨むはずであったが、城を出るまぎわになって、急に中止された。

おなじ日、安倍半之助の家では、亡父、伊右衛門の三回忌に当り、麻布南部坂の昌雲寺で、その法要をおこなった。寺へは十時にあつまり、終つてから家で昼食をだす。

ということ、まえの日に、麻布谷町の安倍から、料理人がよこしてあり、また、その日は朝はやく、二女の佐枝が、若い召使を三人つれて、手伝いに来た。

「大げさなことになったものですなえ、なに様の法事ではあるまいし、ひどいもんだ」

半之助は、ふきげんに眉をしかめた。

「でも谷町でして呉れるものを、断わるわけにもいかないでしょう」

母のしずはさりげなく云つた。

「それに、このあとは七回忌ですからね、三年にはどこでもこのくらいのはしますよ」

「しかしそれだけの意味じゃないんだから」

独り言のように、口の中で呟やいて、それからそこを去

りながら、低いけれどもきつぱりした調子で云つた。

「私は寺から脇へまわります」

母はなんとも云わなかった。

谷町の安倍は、一族の宗家に当るといふ。宗家などといふと、ごたいそうであるが、お徒士から出た八百石の旗本で、当主になってから、うまく柳沢系にとりいって、現在は千二百石の大御番を勤めている。こちらは一族の末席であり、三百石あまりの新御番にすぎない。そのうえ亡父の伊右衛門が、谷町とのつきあいを嫌っていたので、ごく稀にしか往き来がなかった。それが父の死後、向うからにわかになつて来た。

半之助が新御番になれたのも、じつは、谷町の奔走のおかげだそうである。亡父もその席にいたが、むろん世襲ではなく、裏からしかるべく運動したり、金品を贈つたりしなければならぬ。それを進んでやつて呉れた、ということ、半之助にしても有難い。さもなければ、小普請にはいつて、ことによると一生、退屈きわまる生活を、送らなければならぬからだ。

だが半之助は、それをすなおに、有難い、とは思えなかつた。沖左衛門という、その人は、時流に乗って出世する人間に共通の、押つけがましさと、厚顔と、そして食欲を兼ねそなえていた。その子の又五郎が、これまた父に輪をかけたような性質で、臆面もなく、柳沢家にとりついていて、まわりの者から、——柳沢の御用達、などと、卑しめ

られていた。そればかりではない、谷町が近づいて来た理由の一つは、二女の佐枝を、半之助の嫁に呉れよう、という氣持らしいのである。

——とんでもない。

半之助は独りで首を振った。

母のしずは、谷町との縁組が、実現することを、のぞんでいた。相手は一族の宗家であり、うしろに柳沢という勢力がある。こういう条件は、当時のたいていの母親がそうであるように、しずにも強い魅力だった。良人が生きていたときは、良人と同じように嫌っていたが、わが子の将来、出世のいとぐち、ということになると、あっさり變ることが、できるらしい。それが母の愛情かもしれないが、半之助には相当やりきれなかった。

寺へさきにゆくつもりで、玄關へ出ようとすると、中の間の廊下で佐枝にであつた。

「今日は御主人役でたいへんね」

彼女はこう云って、大胆にこちらを見あげながら、親しげに笑いかけた。

「お友達がいらしたら、みなさんおつれしていらっしやい、たくさん御馳走しますわ」

「有難う、暑いのにどうも」

半之助はあいまいな返辞をして、そうそうに玄關のほうへ去つた。

彼女とは二年このかた、ほんの三度か四度、それも挨拶

を交わすくらいのも、つきあひしかなかった。顔だちもそう悪くはないし、利巧そうでもあるが、どことなく高ぶっているのと、あまりに狎れ狎れしいのとで、半之助にはどうしても、好きになれなかった。

外は風がなく、かなり蒸して暑かった。南部坂のところである昌雲寺の、門のところ、村田平四郎と正木重兵衛が、目を除けながら立ち話しをしていた。

「また中止になったね、柳沢邸へのお成りが、知ってるかい」

正木重兵衛がせかせかと、こう云った。

「知らないねえ」

半之助はそう答え、すぐに村田へ話しかけた。重兵衛はなにかまうちで、伝令、というあだ名がついている。つきあひが広くて、はや耳で口が軽い。わるぎは少しもないのだが、聞いたり見たりしたことは、ごくつまらないことでも、すぐ誰かに話さずにはいられない。自分でも氣がさすのか、——われながらいまましいんだ、しゃべったあとでいつも後悔するんだが、こいつばかりは病氣なんだと思ふね、などと云う。とにかく、これは誰それに話してやりたいと、思って、それを話さずにいると、胃のあたりがむず痒くなってくる、そうであった。

「しばらく、いつ帰ったの」

「今日で七日に、なる、かな」

村田平四郎はまぶしそうな眼をして、いつもの重たいような口ぶりで答えた。

彼は寺社奉行の役所に勤めているが、その用むきで、一年ばかり長崎へいっていた。公用のほかに、自分に必要な本草関係の書物や、資料を集める目的もあったのだが。

「今日のこと、よくわかったね」

「うん、……松室にね、……」

それでぼつんと切れた。

半之助は他の客の来ないうちにとまって、法事のあと、自分たちだけで、ぬけだす相談をもちだした。

「一議に及ばずだね」重兵衛は手を打たんばかりに、「木挽町の茶屋にしよう」

「しかし、それは、ねえ……」

村田平四郎はこう云い洩して、そうしてなにやら補足的な、一種の手まねをした。

主人役がそんなことをしては悪い。というのであろう。

彼はいつもそんなふうには、云いたいことをしまいまで云わず、半分は手まねとか、身ぶりなどで補なうのが癖であった。

「いや、とにかくその接待というのが、とてもつきあえるものじゃないし、ほかにちょっとわけもあるんだ」

「理由なんかいいよ、手筈をきめましょう」

重兵衛は独りで勇み立った。

そこで松室泰介が来たなら、役所に急用ができたと言わ

せ、半之助がさきに寺を出る。あとはそれぞれの口実で、木挽町の山村座の茶屋に集まる。ということに定った。

そこで重兵衛は松室とうちあわせのため、坂の下まで迎えにゆき、三人は方丈へあがったが、まもなく客が来はじめたので、半之助はおちついてゐる暇はなかった。

客は思いがけなく多かった。単に多いばかりでなく、それには谷町の計画があったらしい。なんら縁のない客が四人もいて、読経の始まるまえに、沖左衛門はかれらに、半之助を紹介し、よろしく頼む、というようなことまで云った。

かれらはそれぞれが、その役所の支配といった身分で、なにか沖左衛門と特殊な関係でもあるのか、半之助に対してもあいそよく、「暇があったら、自宅のほうへでも、ぜひ遊びに寄って下さい」などと云った。なかの一人は望月内記といい、大目附の記録所の支配だそうであるが、自分のほうに近く空席ができるから、折をみて推挙するつもりでいる。というふうなことを仄めかした。半之助は当らず触らずの挨拶をし、手があくとすぐに、友達なかまのほうへ引込んだ。

「なに者だい、あの爺さんは」

重兵衛が早速こう訊いた。

「まるでこの法事の周旋人みたようじゃないか、主人公そっちのけじゃないか、いかなる人物かね」

「つまり今日の主人公さ」